



教頭職の「多忙」を考える

浜中町立茶内小学校長 富田直樹

「全国公立学校教頭会の調査」によると、2021年度の教頭の通常日の勤務時間は「12時間以上13時間未満」が32.3%と最も多くなっています。なお、「12時間を超えている」という回答の割合は6割を超えています。また、文部科学省が実施した「教員勤務実態調査」によると、2016年度の教頭の1週間当たりの学内総勤務時間は2006年度と比較して、4時間33分増加しており、多忙化が進んでいると言えます。これらのことは、指針（「公立学校の教師の勤務時間の上限に関するガイドライン」2019年文部科学省）に示された上限、月45時間超えが常態化していることであり、教頭の「働き方改革」が停滞していることだと考えます。

どうして教頭は過酷な勤務を強いられるのでしょうか。いくつか要因が考えられます。例えば、学校教育法第37条に、教頭の職務について「教頭は校長を助け、校務を整理し、及び必要に応じ児童の教育をつかさどる」と規定されています。これは、教頭の職務の対象が、「管理」「経営」「指導」と、学校の全てのことになっているということです。そして、教頭が学校運営の「キーパーソン」であるということです。例えば、新学習指導要領は、地域連携を求めています。答申（『令和の日本型学校教育』の構築を目指して）は、ICTの活用を求めています。いじめや不登校、特別な支援が必要な子どもに対して、組織的な対応が必要です。これらのことが円滑に進められるための業務を主に担うのが、多くの場合、教頭です。

「円滑な学校運営のキーパーソンである教頭の『働き方改革』は進みませんね」と諦めるのではなく、むしろ、キーパーソンだからこそ、一層「働き方改革」を進める必要があります。このことについて、2つの理由が考えられます。

1つ目の理由は、「学校の要」である教頭が疲弊すれば、学校運営は円滑に進まなくなることです。教職員に、更には子どもたちに大きな影響を与えることは間違いないと思います。誰も望まない事態に学校が陥ること必至だと思います。

2つ目の理由は、教頭職の魅力を高めるためにも、教頭の「働き方改革」が必要であることです。釧路管内においても、教頭職のなり手不足は深刻ですが、多忙な教頭の姿を見て、教職員は教頭を目指したいと考えるのでしょうか。学校運営の中核である教頭が疲弊する姿は、むしろ教職員にとって「反面教師」です。そして、教頭の候補者が減少すれば、学校の機能が低下することは明らかです。管内はもとより、全道、全国の将来の学校教育のため、教頭の「働き方改革」を加速させる必要があります。

全ての教頭が、「やりがいを感じる職務」に専念できる環境整備が求められています。

教頭が教員から受ける相談ベスト5

- 1 児童・生徒指導
- 2 保護者
- 3 校務分掌
- 4 職場の人間関係
- 5 施設・設備

教頭がやりがいを感じる職務ベスト5

- 1 教職員の育成
- 2 職場の人間関係
- 3 地域との連携
- 4 保護者・PTAとの連携
- 5 児童・生徒指導上の課題の対応

- ・教頭は学校運営の実務者
- ・教頭は教員を様々な面から支える支援者

「全国公立学校教頭会の調査」に基づいて作成